

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

## 【氏名】

山口 元樹

## 【所属】(助成決定時)

公益財団法人東洋文庫

## 【研究題目】

オランダ植民地期末期インドネシアのイスラーム運動とアラブ世界  
—カイロの定期刊行物『ファトフ』を事例に—

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、エジプトのカイロで発行されたイスラーム系定期刊行物『ファトフ *al-Fath*』(1926-47)に掲載されたインドネシアに関する記事・論説を検討するものである。それによって、オランダ植民地期末期のインドネシアとアラブ世界との関係を明らかにすることを目的としている。本稿では以下の二つの問題を検討する。すなわち、第一に、1920年代後半から1942年にかけてのインドネシアのイスラーム運動がアラブ世界から受けた影響とインドネシア側の自律性、第二に、この時期のインドネシアとアラブ世界間のイスラームのネットワークを形成した仲介者の実態と役割である。

現代において国際相互理解を促進していくためには、イスラームという宗教やイスラーム世界に対して理解を深めることが重要である。本研究は、インドネシアにおけるイスラーム運動の性質とともに、イスラーム世界の中の多様性と地域性、そしてイスラームと国民国家との関係に関する理解を増進することに貢献することを目指す。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、まずインドネシアにおけるオランダ植民地期の終わりである1942年までの時期を対象に、『ファトフ』に掲載されたインドネシアに関する記事・論説を網羅的に収集してリストを作成する。その上で、それらの記事・論説について、それぞれのタイトル、大まかな内容、寄稿者や情報源、さらに記事・論説の掲載の頻度といった情報をまとめることで、オランダ植民地期末期のインドネシアとアラブ世界の関係の全体的な傾向を示す。

次に、インドネシアで発行された定期刊行物やオランダ植民地政庁の公文書などを利用しながら、それぞれの記事・論説の詳細な分析を行う。ここで特に注目するのが、アラブ世界の人物が書いた論説に対するインドネシア側の反応とインドネシア人の寄稿者や情報源の2点である。第一の点については、特に国民国家をめぐる問題に関して、インドネシアのイスラーム運動がアラブ世界の人物の考えをどのような文脈で、どの程度受容したのかを検討していく。それによって、アラブ世界がインドネシアのイスラーム運動に対して及ぼした影響とインドネシア側の自律性を考察する。第二の点については、『ファトフ』におけるインドネシア人の寄稿者や情報源が、アラブ世界との間の仲介者として重要な役割を果たしていたものと推察される。それらの寄稿者や情報源を検討することで、両地域間の定期刊行物を介したイスラームのネットワークの実態を提示することを試みる。

以上のような『ファトフ』の分析において、同じくカイロで発行され、東南アジアにも流通していたイスラーム系定期刊行物である『マナール』との比較を行う。『マナール』はイスラーム改革主義運動を牽引した有名な定期刊行物であり、東南アジアのムスリムとの関係については、既に研究が存在する。本研究は、『マナール』自体やこの定期刊行物に関する先行研究の成果を参照することによって、『ファトフ』の特徴

や重要性をより明確にする。

【結論・考察】（４００字程度）

『ファトフ』には、1926年から1942年までの間に、インドネシア関係の記事・論説が200件以上掲載されていた。『マナール』に掲載されたものは150件程度であり、『ファトフ』がインドネシアのムスリムの間で広く流通し、影響力を持っていたことが明らかである。インドネシア側の主な寄稿者は、インドネシアに住むアラブ系住民とアラブ地域（カイロやメッカ）への留学生・留学経験者であった。『マナール』においても同様の傾向が見られることから、これらの人々がインドネシアとアラブ地域の中の仲介者としての役割を果たしていたと言える。アラブ世界の人物がインドネシアについて書いた論説は、インドネシアのイスラム系定期刊行物にしばしば引用されていた。ただし、それらの論説がインドネシアで反響を呼ぶまでには時間差があり、内容の理解の仕方にもインドネシアのムスリムの間でかなりの差異が存在している。したがって、アラブ世界からの影響の受容は、インドネシア内の状況や個々のムスリムの選択に大きく依存していたと考えられる。

